

企画名： 「ハタチの議論 ～若者が考える原子力～」
実施日時： 2012年1月14日（土） 17:00～18:30
実施場所： パシフィコ横浜会議センター 4F 414+415
登壇者： 川畑美結（SARA（学生から原子力を考える会）代表、恵泉女学園大学）
清野翔（SARA（学生から原子力を考える会）、帝京大学、横浜市民測定所マネ
ジャー）
村西祐亮（SARA（学生から原子力を考える会）、慶應義塾大学）
田中真衣（福島大学）
高畑祥史（福島大学）
参加人数： 58名
文責： 川畑美結（SARA（学生から原子力を考える会）代表、恵泉女学園大学）

私達SARA（学生から原子力を考える会）は、「実生活での原発事故・放射能の被害」というテーマで、学生5人によるトークイベントを行いました。企画名にもあるように若者を意識したため、参加された方々も同年代の若者が多かったように思います。

私達SARAのモットーは「考える」です。そのモットーに基づき、脱原発を目指すイベントの中であって脱でも反でも推進でもない「考える」もちこみ企画にしました。賛成か反対かの入口の話です。正直なところ、脱原発を目指す方々にとっては物足りない企画だったかもしれません。でも「考える」という基礎中の基礎を企画のテーマにすることで、改めていろいろな発見があったように思います。

まず、福島に住む学生と関東に住む学生との意識の差、地域関係なく同世代間の意識の差が浮き彫りとなりました。放射能の危険性を常に意識しながら生活する関東メンバー。どこかで危険性を感じながらも「あたりまえの日常」が存在するという福島メンバー。また関東も福島も関係なく、友人との日常会話で、放射能の影響により出産をどうするかということが出てくる学生。放射能・原発の話をするだけで友人から避けられたり、あからさまに嫌がられたりする学生。「当事者意識」というものの存在を考えさせられました。

危険かもしれない、福島・関東に生活していることを悩んでいる学生も少なくありませんでした。両親や周囲の人に移住や留学をすすめられたことがある人はいるか、という問いに会場の参加者からも数名手が挙がりました。

避難と除染をどう考えるか。命優先だけれど、一概に決めるのはどうか。

無関心をどうするか。そもそも無関心は悪いことなのか、責められることなのか。私達は原発・放射能以外の問題で無関心ではないだろうか・・・。

今回は「考える」がテーマということで、皆が考えていることを素直に話すというスタンスをとりました。今回の企画のように、いくつもある話題の一つとして、変に力を入れずに、日常的に原発・放射能の話題を普通に話すことができる。そんな社会になったら何か変わるような気がします。

これからの未来を考える、きっかけづくり。そんな企画にすることができました。そして、脱とか反とかの前に、ちょっと立ち止まって「考える」。その重要さも身に染みる企画でした。

